

もの知り こどもタイムズ

砂漠を緑にかえたお医者さん 中村哲先生の物語

3

「百の診療所よりも一本の用水路」

水が足りなくなり、食べ物もないアフガニスタンでは、体が弱って病院に来る人がどんどん増えていきました。「薬で病気を治す前に水がいる」。そう考えた中村哲先生は井戸をほることになりました。とても深い穴をほって地面の下にある水をくみあげるので、53歳のときでした。

井戸をほって飲み水に 「それでも足りない」(53歳)

食べ物も水もなく困っていたアフガニスタンの人たちは、よろこんで井戸ほりに協力しました。2000年からあちこちの村に1600本もの井戸をほりました。

なんとか飲み水は手に入るようになったけれど、それでも畑の野菜にあげる水はまだ足りませんでした。アフガニスタンの人たちは、自分で食べるものは自分の畑で育てます。人々は畑仕事ができないので、困っていました。

そこで、中村先生はある大きな計画を始めることにしました。



地面の下にある水をくむための井戸。工事をしている中村先生も深くはった穴の中におりていきました。=PMS提供

川の水を村々に、大計画スタート 「設計図は自分でかく」(56歳)

立てた計画は、川の水を村々にとどける水の通り道「用水路」をつくることでした。中村先生がいたアフガニスタンの東側にはクナール川というとても大きな川があります。

2003年、56歳の中村先生はこの川の水を流す用水路をつくることにチャレンジしたのです。

中村先生は「緑の大地計画」と名前をつけました。干からびた茶色い大地を昔のように木や花、野菜で緑いっぱいにするのです。

けれども中村先生はお医者さん。用水路などつくったことはありません。設計図をかくて工事をするためにはむずかしい計算もしなくてはなりません。

中村先生は、自分の高校生の娘がつかっていた教科書を借りて苦学な数学をいっしょうけんめい勉強することから始めたのです。

気温が50度を超えることもある砂漠での工事です。「百の診療所よりも一本の用水路」。中村先生たちはこれを合言葉に用水路づくりに汗を流しました。



用水路の工事現場。ガンベリ砂漠の地平線にむかってまっすぐのびています。=PMS提供

「名前はマルワリード(真珠)」(63歳)

用水路をつくるには材料や道具を買うお金がかかります。ありがたいことに日本では、「アフガニスタンの人を助けたい」と思う人たちがペシャワール会を通してたくさんお金を送ってくれていました。

お金ばかりではありません。日本の若い人たちが工事を手伝おうとアフガニスタンにやってきました。

水がないために村を離れていた人たちも「水がくる」といううわさを聞きつけて帰ってきました。

生きていくためのお金をかせぐために兵隊の仕事をしていた人もよほど銃を捨て、シャベルを持って工事に協力しました。500人も人が働く日もありました。

あちこちから集めた石を積み重ねて、用水路をつくりました。シャベルで地面をほり、大きな岩があれば機械でけずりました。



マルワリード用水路。クナール川から離れた場所にある畑まで川の水をとどけてくれます

7年かけて完成



工事をしているアフガニスタンの人たち

2010年、7年かけてようやく一本の用水路が完成しました。名前は「マルワリード」。地元の言葉で「真珠」という意味です。中村先生は63歳になりました。



特別サイトに子ども向けページ

西日本新聞の「中村哲先生特別サイト」の子ども向けページができました。アフガニスタンの子どもたちの写真などを見ることが出来ます。